

「学びを可視化する日常の空間装飾」

— アート作品や学生の作品を利用した大学内の環境活用—

池田 拓馬

要旨

八戸学院大学短期大学部幼児保育学科棟の学生ホールに設置した H∞L Gallery（ホールギャラリー）を起点にアーティストのワークショップや学生の作品展示など様々な企画を行ってきた。コロナウイルス流行禍では外部の講師を招聘できないなどの制約から日常的に学生たちの作品を展示し装飾する機会が多くなった。そうした日常的な展示の機会をコロナ禍以降も継続して設けることで、学生にとって安心感や有用感を与えるとともに、来校者へは本学での学びを可視化することを目的とした。様々なワークショップの開催、アートを通じた交流を行うとともに、学生自身の作品やワークショップの成果作品の展示が学生生活の環境に与える意義について、活動報告をまとめるとともに論じていく。

キーワード：オルタナティブスペース | ワークショップ | アーティストインスクール

1. 目的

八戸学院大学短期大学部幼児保育学科棟の学生ホールに設置した H∞L Gallery（ホールギャラリー）を起点に日常的な作品の展示の機会を設けることで、学生にとって安心感や有用感を与えるとともに、来校者へは本学での学びを可視化することを目的とした。また、様々なワークショップを開催しアートを通じた交流を行い、多様な価値観や個性を受け入れる素養を育むことも目的としている。学生自身の作品やワークショップの成果作品が生活環境に展示されることで、大学生生活に活気を与え、学びの成果を振り返るとともに学びを深めるきっかけとした。

4月	学生作品展示「青いリンゴをどう褒める？」「窓に描こう」
5月	学生作品展示「紙粘土でオリジナルお弁当を作ろう」「変な道具で描こう」
6月	学生作品展示「手作りラトルを作ろう」
7月	七夕飾り吹流しの展示、笹の壁画と七夕飾りの展示
10月	ロニエル・コンプラ ワークショップ及び成果作品の展示
学生祭	「染め紙を用いたフラッグ制作」「壁面装飾の展示」
11月	唐澤太輔「うごめけ！マステで粘菌ワークショップ！」の開催
12月	樹脂粘土を用いた壁画制作

2. 2023 年度の活動内容

2023 年度においては学生の作品展示、海外のアーティストや国内研究者のワークショップなどおよそ 11 回の企画を行った。主な内容は下記となる。

	環境芸術学会 蒲田大会において東方悠平氏と共同による口頭発表
2月	八戸学院大学短期大学部紀要第 58 巻へ実践報告の投稿

2-1 4月 学生作品の展示

「青いリンゴをどう褒める？」

4月には幼児保育学科2年、表現Ⅰの講義内で制作した「青いリンゴをどう褒める？」という課題の作品展示を行った。本課題は画用紙に任意の形を描きその中をクレヨンで自由に塗りつぶすというものである。クレヨンを塗る際は様々な色を混色させ、できるだけ自分自身のオリジナルの色を作ることを指導した。色を塗り終わった後、それを色画用紙等を用いりんごのように見立てることを告げ、思いおぼいの架空のリンゴを制作する。りんごにすることを告げた際は急遽言われた難題に否定的な反応を示す学生も多かったが、それぞれ工夫しながらなんとかリンゴの様な作品に仕上げた。その作品を学生自身の手でギャラリーの壁面に展示し、さらに他者が品種名（題名）を考え付箋で作品の周りに自由に貼った。本課題の特徴は絵を描く際に最終的な完成のイメージを伝えないことで、固定概念に縛られず自由に描くことを目的としている。また自分自身の絵に題名をつけるのではなく他者の作品に題名をつけるという、普段の制作では行わない体験をすることで、鑑賞行為を深めるねらいがあった。休憩時間などには数人が集まって友人の作品を見ながら談笑する様子が見られた。



図 1 「青いリンゴをどう褒める？」展示の様子



図 2 固定概念に囚われない様々な形のりんご



図 3 貼る場所は学生が自分で決めて展示を行った



図 4 付箋には他者がつけた題名が書かれている

2-2 4月 学生作品の展示

「窓に描こう」

同じく4月には、学生ホールのガラス面にアクリル絵の具で自由に描画をした。ゴミ袋を切り開き、テープと合わせて養生シートを作ること制作時において、汚れに配慮しながら活動を行うことを指導した。また描画にあたっては各々が自由に発想し描き、キャラクターを描く学生や背景の風景に合わせた図

柄を考える学生、また手のひらに絵の具をつけスタンプのようにして描く学生など様々だった。できあがった作品は学生ホールの窓を彩り、空間をより一層華やかにした。また学生同士で他の学生が描いた作品に興味深く眺める様子が印象的だった。



図 5 外に見える木に合わせて描かれた桜の絵



図 6 窓の枠にめいっぱい虹を描いた様子



図 7 全体像

2-3 5月 学生作品の展示

「紙粘土でオリジナルお弁当を作ろう」

5月には紙粘土で制作したオリジナルのお

弁当の作品展示を行った。制作方法は紙粘土に絵の具で着彩し、本当の食材を扱うようにヘラで切ったり盛り付けたりしながら思いおもいのお弁当を制作した。材料は紙粘土の他に毛糸や画用紙、ニスなどさまざまなものを使用した。お弁当箱も動物の形をしたものや、サンドイッチなどを入れられるものなど数種類を用意し学生たちの意欲を高めることをねらった。ご飯やおにぎりはストローを使い紙粘土に跡をつけ、米粒の質感を表現していた。ハンバーグなどは絵の具をソースに見立て粘土に垂らした後、ニスなどで艶を出すなどそれぞれ制作方法を工夫し食材の質感を表現していた。また毛糸や画用紙なども用いながら彩りを豊かにした。他にもキャラクターを模した「キャラ弁」をイメージし制作する学生も多かった。

展示には長テーブルに、チェック柄のテーブルクロスを敷きその上にお弁当を並べた。テーブルクロスを敷くことで食卓のイメージを想起させ、お弁当の作品をよりリアリティーを持った雰囲気で開催することを心かけた。鑑賞した学生からは「美味しそう」「可愛い」「どうやって作ったんだろう」などと話しながら鑑賞し興味や関心が高い様子が伺えた。また、短期大学部に系列の園児が来校した際、作品を鑑賞しながら「僕のお弁当にこれ入ってるんだよ」「お寿司食べたことあるよ」「お母さん卵焼き作ってくれる」など、学生たちの作品から園児自身の生活環境を連想し言葉を発している姿も見られた。また、短大の体育館に訪れていた大学のスポーツ系の部活動の学生からも「うまそー」「腹減ってきた」など自由に感想を言いながら鑑賞する様子が見られ、食という共通性の高いテーマが多くに関心を集めるきっかけとなった。



図 8 「紙粘土でオリジナルお弁当を作ろう」



図 9 お弁当箱もそれぞれ気に入ったものを選んで
いる



図 10 趣向を凝らしたそれぞれのお弁当

2-4 5 月 学生作品の展示 「変な道具で描こう」

同じく 5 月には「変な道具で描こう」と題した共同画を 223、224 教室前の廊下に展示した。変な道具とは通常、描画に用いない道具のことで、例えばタワシや食器洗い用のスポンジ、サンダルや、水鉄砲などである。そのよう

な様々な道具を用意し絵を描く演習を行った。描く際は 2～3 名のグループを作り、1 枚の模造紙に自由に描いた。通常、絵を描く際は筆などを用いるが、それは高度に発展してきた描画技術の中で作られた道具であり、本来絵とはどんなものでも描くことができる。また不自由な道具を用いることで意図的な表現が難しくなり、「上手、下手」という価値観ではなく「楽しむ」ことを目的に描くことができる。それは描かれた結果が重視されるのではなく、描く行為そのものが重視される行為につながると考えた。

制作された作品はどれもダイナミックな画面となり、絵の具が弾け飛ぶ様子、何かを叩きつけたような痕跡、手に直接絵の具をつけ手のひらのスタンプをした様子、絵の具が水溜まりのように画面いっぱいに広がった様子など、行為を楽しんだ様子が画面から伝わる作品となった。それらを美術実習室へ続く 223、224 教室前の廊下に展示した。この通路は多くの教職員にはあまり目にしない場所だが、学生は美術やピアノレッスンの講義の際は必ず通る通路であり、講義に行く際に何気なく見ている様子があった。また短大の施設見学に訪れる高校生も興味深く見学する様子も見られた。



図 11 「変な道具で描こう」用意した道具



図 12 模造紙に共同で描いている様子



図 13 「変な道具で描こう」展示の様子



図 14 「変な道具で描こう」展示の様子

2-5 6月 学生作品の展示

「手作りラトルを作ろう」

6月には幼児保育学科2年生が制作した「ラトル」の展示を行った。ラトルとは乳幼児の遊ぶ鈴のついた玩具のことで、本課題ではドーナツ型のフェルトにそれぞれ趣向を凝らした造形を行い、中に綿と鈴を入れたものを制作

した。制作にあたっては普段使わない針と糸を用いて粘り強く制作する様子が見られた。

制作された作品は学生ホールに展示台を置き展示した。この作品は系列の園児をはじめ、学生祭で来校した子どもに大変人気で一人でいくつものラトルをもち、鈴の音を鳴らしながら遊ぶ子どもの様子も見られた。また帰る際などは持ち帰りたいと主張し展示場所になかなか返せない様子も見られた。学生たちの子どもを思い制作する能力と、子どもが好むものを同じように自分たちも好み制作することができる学生たちの資質を垣間見ることができた。



図 15 「手作りラトルを作ろう」作品



図 16 「手作りラトルを作ろう」制作の様子

2-6 7月 学生作品の展示

七夕飾り吹流しの展示、笹の壁画と七夕飾りの展示

7月には七夕飾りの制作に合わせギャラリーの壁面に竹や笹の絵をワークスタディーの

学生と描き、そこに美術 I の講義にて制作した七夕飾りと願いをこめた短冊を学生自らの手で飾った。また同じく講義内で制作した吹き流しも学生ホールに飾り付けた。様々な吹き流しで彩られたホールは涼しげな雰囲気を感じさせる装飾となった。また折り紙で作った飾りや短冊などもギャラリーの壁面いっばいに飾られ華やかになった。短冊に書かれた願いからは「いい人に巡り会えますように」「今の幸せが続きますように」「ピアノが上手くなりますように」など学生らしい願いが見られた。また、「就職できますように」や「みんなで卒業できますように」など 2 年生が書いた願い事の短冊も見られた。



図 17 壁面の笹に短冊や折り紙が飾られた様子



図 18 吹き流し展示の様子

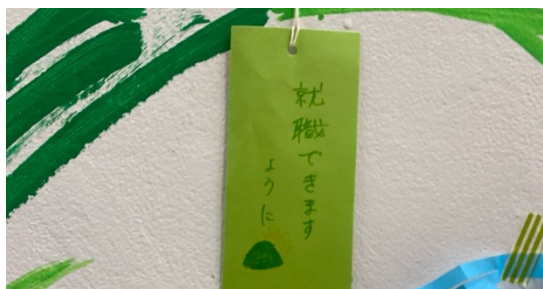


図 19 短冊の願い事「就職できますように」

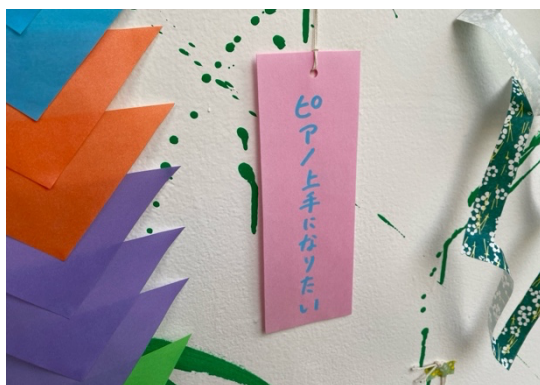


図 20 短冊の願い事「ピアノ上手になりたい」

2-7 10 月 ロニエル・コンプラ

ワークショップ及び成果作品の展示

10 月にはフィリピンのセブ島で活動するアーティスト、ロニエル・コンプラを本学に招きゼミナールの講義でワークショップを行った。ロニエルは元々フィリピン大学セブ校で絵画を学んでいたが、その後は木の枝や石、土、骨などの自然物を用いるなど、扱う素材の幅を広げていった。作品も、版画や絵画、彫刻やインスタレーションなど、さまざまな形式で制作している。地域の歴史や文化、工芸品の素材や技法、また個人的な物語などを、その場所の記憶が反映されたものとして捉え、自身の作品制作に取り入れている。今回はその中でも建物や人体そのものの凹凸を写し取るフロッタージュ技法の「Luta」をテーマにワークショップを行った。



図 21 ロニエル・コンプラ ワークショップ



図 22 「Luta」制作の様子

アーティストからこれまでの経歴や作品などについてレクチャーを行い、フロッタージュ技法についての簡単な説明があった。今回はアーティストからの指示で青い色の塗料一色を用意して使用した。また、ロール状の綿布を用意して、学生は自由に布地上にスペースを見つけて、何度も対象の凹凸を擦り取っていった。擦り取る布がロール状であったため、アーティストが紹介した事例のように全身を擦り取ることに挑戦した。しかし、形が一定ではない柔らかい身体を上手く擦り取ることは難しかった。そのため、プラスチック製のパレットなど、硬くて平らな形状で、上手く擦り取ることでできる素材を探して、何度も擦り取っていたことが印象的だった。多くの学生が工夫しながらフロッタージュに取り組んでいた。

ワークショップの成果作品はギャラリーの壁面に展示した。展示にはアーティスト本人とワークスタディーの学生2名がサポートに加わった。ギャラリーの内側の壁から外側の壁へと続くように繋げて展示し、ガンタッカーを用いて布を固定、テンションをつけながら張り、シワの無いうようにギャラリー全体を包んだ。まるでギャラリー全体がラッピングされてような状態となり、学生たちが写し取った様々な形が鑑賞しやすい状態となった。

学生からは「授業で行ったことのある技法だったが、違うやり方があって面白かった」「ロニエルと仲良くなれて嬉しかった」など

の感想が聞かれた。フロッタージュという保育の中の造形活動にも用いられるシンプルな表現技法がアーティストの視点を通じ、少しやり方を変えるだけで、大きな発見や新しい表現方法につながることを学生たちも実感できた。また何よりも表現活動を通じ、人々が交流することは言葉が通じていなくても、信頼関係や安心感が得られることも分かった。

またこの取り組みの内容は環境芸術学会第24回大会「産業と芸術と人の関わり、大田区から未来へ」2023年12月9日、東京工科大学蒲田キャンパスにおいて、東方悠平氏と共同で口頭発表を行った。発表タイトルは「芸術実践における「手ざわり」～ロニエル・コンプラの「Luta」ーフロッタージュ手法を手がかりに～。発表は20分と質疑応答5分、計25分に渡って行われた。また、後掲する発表概要は学会機関誌「環境芸術31」30-30頁に掲載された。



図 23 ワークショップ成果作品展示作業の様子



図 24 「Luta」展示の様子



図 25 写し取られたガンタッカーなどの跡



図 26 作品部分

2-8 学生祭 学生作品の展示

「染め紙を用いたフラッグ制作」「壁面装飾の展示」

10 月に行われる学生祭に合わせ学生ホールと幼児保育学科棟 1 号館の階段付近を学生の作品によって装飾した。学生ホールには幼児美術Ⅰの講義内で折り染めした和紙から制作したフラッグを 54 名分繋ぎ合わせ天井全体に吊るし展示した。一つひとつの作品は 1 メートル程度の作品だが、作品を繋ぎ合わせることで大きな作品となり空間全体を華やかな雰囲気に変えることができた。また壁面装飾も同じ講義内で制作し、作品をガラス面に展示した。この制作に関してはほとんど筆者は指導を行わず、好きな装飾を作るようにとだけ伝え、学生は黙々と制作を始め完成させることができた。技術的に困っている学生には適宜指導を行ったが、このような保育の現場に直結するような技術や制作に関しては、

学生たちの意識や意欲の高さが伺えることがわかった。また学生祭にあわせ行ったことで多くの人の目に触れることができ他の学生祭の催し物と合わせ、空間を華やかに装飾することができた。

2-9 11 月 唐澤太輔「うごめけ!マステで粘菌ワークショップ!」の開催

11 月には唐澤太輔氏を招聘しワークショップ「うごめけ!マステで粘菌ワークショップ」を開催した。唐澤氏は秋田公立美術大学美術学部アーツ&ルーツ専攻ならびに大学院複合芸術研究科の准教授である。その研究の中で粘菌(変形菌、真正粘菌)という動物、植物、菌類どれにも所属しない不思議な生物を採集・観察し、新しい表現の方法を模索する「粘菌研究クラブ」を主宰している。粘菌研究クラブでは粘菌の魅力と可能性を、アートを通じて発信する活動を行っている。

本ワークショップは、まず唐澤氏より粘菌の生態やこれまでの粘菌研究クラブでの活動内容などをレクチャー形式で紹介された。その後ギャラリーの壁面に参加者の学生が黄色のマスキングテープをただひたすら貼っていく。粘菌の広がりイメージし、柔らかく有機的な形を作ること、変幻自在に形を変え広がり続ける粘菌(変形菌)の様に、マスキングテープを貼っていくことが伝えられた。学生たちはマスキングテープを貼ることに夢中になり、他の学生が貼った箇所などと融合しながら、まるで本当の粘菌のようにうごめき、渦巻くような形を作り、ギャラリー全体を覆っていった。この活動はゼミナールⅡ・Ⅳ、幼児美術Ⅱの講義で行った。

またギャラリー内側には「moi moi-même」と題した、秋田公立美術大学、粘菌研究クラブ制作のインスタレーションを展示した。素材はラグマット、フェルト、毛糸などを使用し、まるでふかふかの子ども部屋のような印象を与えている。一方で中に仕込まれたスピーカ

一からは秋田公立美術大学学生たちの心臓音が流され不思議な展示空間となっていた。

ワークショップに参加した学生からは「貼るだけなのに楽しかった」「夢中になって貼っていた」などの感想が聞かれた。シールを貼るなどの行為は子どもたちも好んで行う傾向があるが、それは、ペタッと貼る時の手指の感触や、自分がここにいるという小さな存在証明にもつながる行為が、子どもを心地よく刺激するのではないだろうか、それと同じように学生たちもペタペタと貼る感触を楽しみ自分たちの存在証明を粘菌のように表現したのかもしれない、と唐澤氏は述べていた。マスキングテープ1つという最小限の材料の中でも複雑な表現活動を学生に体験してもらう貴重な機会となった。



図 27 唐澤氏レクチャーの様子



図 28 粘菌ワークショップ学生の実作の様子



図 29 粘菌ワークショップ展示の様子



図 30 ギャラリー内部「moi moi-même」



図 31 ワークショップ後の記念撮影

2-10 12月 樹脂粘土を用いた壁画制作

11月に行った唐澤太輔氏による「うごめけ!マステで粘菌ワークショップ!」の後、同じく粘菌をテーマとして樹脂粘土を用いたワークショップを開催した。講師は本学幼児保育学科講師の船山哲郎氏。船山氏は以前秋田公立美術大学で助手をしており、唐澤氏とともに粘菌研究サークルの活動に参加していた。今回の制作方法は樹脂粘土を手のひらで温めながら細長く伸ばしガラス面に貼り付けていくというものだ。樹脂粘土での制作はマスキングテープを用いた制作方法と違い、広範囲に作品を広げていくことが難しい。その反面より粘菌のように小さく密度が高い状態で複雑な形を作っていくことができる。また樹脂粘土の色彩も豊かで学生それぞれが作った形が重なり合いまるで自然の紋様のような形態となった。幼児美術Ⅱの講義内で2コマ2クラス計15人の学生が参加した。



図 32 樹脂粘土を用いた粘菌ワークショップ

3. まとめ

2023 年度は前期の講義において 1 学年、2 学年ともに美術系の講義を私自身で担当することができ、全学年の学生の作品を学生ホールなどに展示できた。また本年の研究活動を通じ、日常的に学生の作品が見られるようにしておくため季節に応じ展示内容を替えていくことは想像以上に難しい作業だった。講義の運営や学務と並行し、展示替えを行うことは容易ではなかった。しかし、学生たちの作品を展示することで、講義内での学びだけではなく、互いの作品を鑑賞し合う機会が得られた効果は大きかったのではないだろうか。「こんな表現のアイデアがあったのか」「誰々さんは丁寧に作っている」「かわいい作品」などと感想を述べる姿が見られ、自身の学修を振り返り確認する機会となっていた。また何よりも様々な表現の方法や個性があることを知る機会となったことは、将来、幼児教育に携わる学生にとって子どもの多様性を受け入れる素養を育む体験でもあったのではないだろうか。

そのように熱心に鑑賞する姿は展示後、数日は続くがその後は何も興味がないように、学生たちは作品の前で立ち止まらなくなる。そのような時に私から学生へ「そろそろ窓の作品消そうか？」などと問いかけると「学生祭まで取っておいて」「来た人に見てほしい」などしっかりと愛着を持って作品の存在を感じていることも伺えた。

また、来校した高等生や中学生も熱心に作品を見たり笑い合ったりしている姿が見られた。また、引率している担任の先生も「きつとこういうふうにしたから、しっかりと見ておくように」などと説明していただいている様子もあった。また本学の学生ボランティアが施設紹介をしている場合も、誇らしげに説明している様子が見られた。そのようなことから本学の学修の内容を伝える機会にもなったのではないだろうか。

幼児教育の環境構成においては子どもの作品を生活空間に飾ることは、子どもの達成感や満足感、自信や居場所づくりにもつながり心の安定や表現を楽しむに育てると言われている。また解釈の難しい現代美術に親しみ、対話を通じた鑑賞を行うことで多様性を受け入れ、理解しにくい事柄に対し忍耐強く理解しようとする姿勢が育まれると言われている。本研究を通してアートに触れること、また自分達の作品が生活の中に存在することで子どもが感じるように安心感や表現を楽しむに育まれ、さらに多様性を受け入れる素養の一つを身につけるきっかけになったと推察する。

今後も学生たちの学びの向上と本学の魅力を発信していくために、学生の作品展示や現代美術のワークショップなどを計画していきたい。



図 33 「moi moi-même」部分



図 34 粘菌ワークショップ成果作品 部分



図 35 窓から覗く粘菌を模した作品

謝辞

本研究実施にあたり滞在制作を快諾いただき、出品及びワークショップの実施をいただいたロニエル・コンプラ氏、唐澤太輔氏、また実施にあたり多大な協力をいただいた本学教員の船山哲郎氏、ワークショップに取り組んでいただいた池田ゼミナール学生、講義を通じて作品の制作と提供をいただいた幼児保育学科の学生の皆さんには感謝の意を表します。八戸学院大学短期大学部後援会、八戸学院大学短期大学部教職員の皆様には本研究活動にご理解とご支援をいただき心より感謝申し上げます。金子瞳さん、太田彩夢さんにはワークスタディとして作品の展示や様々な準備のサポートを行なっていただき感謝申し上げます。

本研究の実施にあたっては令和5年度八戸学院大学短期大学部後援会特別助成を受けました。

図 22、図 24、図 33、図 34、図 35 の撮影は船山哲郎

その他の図は筆者撮影、記録としてビデオ・写真撮影を行い、研究のために使用することを事前に了承いただいております。

執筆者紹介（所属）

池田 拓馬 八戸学院大学短期大学部
幼児保育学科 准教授